

新 歌人群像

高安国世

永遠の探求者

栗木京子



一 駆け抜けた人生

高安国世たかあきくによは一九一三年（大正二年）八月十一日、大阪市東区で生まれた。父の道成は代々続く外科病院の院長。母やす子は関西社交界の中心的人物で明星派の歌人として知られ、のちアララギに転じて斎藤茂吉もきちに師事した。六人兄弟の末子として生まれた国世には喘息ぜんそくの持病があり、幼少期はたびたび芦屋あしやの別邸で療養生活を送ることになった。そうした日々の中で茂吉をはじめ石川啄木たくもくや長塚節のぶらの歌集に出合い、自らも作歌をはじめた。一九三四年、大阪滞在中の土屋文明ぶんめいに初め

て対面して心酔。アララギに入会して本格的に短歌に取り組む決心をする。また同年、京都大学文学部（ドイツ文学専攻）に入学。以後、リルケやトーマス・マンの研究に携わる。敗戦直後からアララギでは地方誌の出版が盛んになっていった。高安も「高槻」「ぎしぎし会々報」「フェニキス」などの創刊に協力し、関西歌壇のリーダーとしての地位を固めてゆく。そのかたわら、四七年には新歌人集団に参加し、近藤芳美よしみ、加藤克巳かつみ、宮柁二ふたじらの超結社の同世代歌人と親交を深めていった。四九年、第一歌集「真実」を刊行以来、五年「Vorführung（フォアフューリング）」、五二年「年輪」など次々に六冊の歌集を出版。

2001.07



右から国世・河野裕子・永田和宏（昭和47年高安家の庭）

その間、五四年には短歌結社誌「塔」を創刊している。歌人としての活動と並行してリルケの翻訳本を出版したり、ユネスコ地域文化研究員としてヨーロッパを訪ねるなど、じつに精力的な活躍を見せた。六三年、京都大学教授となる。六六年には京大短歌会を発足させ、永田和宏ら学生歌人たちの指導に力を注いだ。

第七歌集『街上』（六二年刊）、第八歌集『虚像の鳩』（六八年刊）などの方法論的な実験を経て、七二年には信州に山荘を建てた

二 作風の変遷

ことを契機に、自然への親しみを深める。七六年に京都大学を定年退官したのちも、関西学院大学で教鞭をとりつつ『新樹』『湖に架かる橋』『光の春』などの歌集を出版。活動的な日々を送っていたが、八三年に胃癌の手術を受ける。小康を得たものの翌八四年七月に癌転移による臓器からの多量出血のため急逝した。享年七十歳。同年暮れに生前の全業績に対して第七回現代短歌大賞が贈られた。

ほぼ五十年間にわたる作歌生活の中で、高安は大きく三度作風を変えている。

○第一期 第一歌集『真実』
師である土屋文明が提唱した「生活即短歌」の信条に忠実に従い、日常生活の喜怒哀楽を率直な言葉で表わした作品集。

○第二期 第七歌集『街上』
現実に対して受身で向かうのではなく、日常の裏側に見え隠れする不思議な一瞬を言葉によって果敢に捉えようと試みた作品集。

○第三期 第十歌集『新樹』
大自然の中に分け入り、自然の一部としての人間の在り方をのびやかに感受した作品集。

幾たびも作風を変える歌人は多いが、たいていは若書きから成熟を経て老成へと向かう道のりをたどる。だが高安に特徴的なのは、まるで脱ぎ捨てるかのように劇的に作風が変化することと、年齢を重ねるにつれて老成の逆でむしろ若返ってゆくような印象を与えることである。つねに新風を取り入れながら、未知の分野へ乗り出そうとしている。永遠の探求者と呼んでもよいほどである。短歌一辺倒ではなく、ドイツ文学など外国文学の影響を反映させながら表現と向き合ってきたこと、学生短歌会の指導者として時代の最先端の潮流に身を置きながら作歌を続けてきたこと。

この二点が高安の歌に終生みずみずしさを与えた要因ではないかと思う。また、京都に在任していたため、いわゆる中央歌壇のしがらみから距離を置いていたことも、自由な作風を維持する結果になったのかもしれない。

代表歌を選び出してみると、おのずから各時期の作品傾向を反映したものと成る。

かきくらし雪ふりしきり降りしづみ我
は真実を生きたかりけり [Vorfrühling]

Vorfrühling（フォアフリューリング）は早春という意味のドイツ語。第一歌集『真実』に先行する時期の作品を収めており、実質的

高安国世

な処女歌集である。これはその巻頭歌。父の医業を継ぐべく旧制高校の理科に在籍していたが、文学への思い絶ちがたく文学部への転身を決意。ついに両親に打ち明ける。その折の心の昂ぶりの中から歌い出された作品である。「かきくらし」は、あたりがすっきり暗くなり、という意味。「ふりしきり」「降りしづみ」の対句表現に清新な勢いがあり、結句「生きたかりけり」の「途な願いとよく呼応している。青年歌人の出発にふさわしい一首である。

男として仕事したしと言ふさへにいた
いたしき迄に妻を傷つく
【真美】

第一期の典型とも言える、現実直視の歌。敗戦後間もない時代、喘息の発作に苦しむ、生活は窮乏を極めていた。長男の病死、幼い三人の子の養育、妻も病みがちとなり、やがて三男の聴覚に障害のあることがわかる。物心両面での痛みはいかばかりであったろう。しかし高安は現実から目をそらさず、傷口に塩を揉み込むようにして苦しみを歌った。夫婦の葛藤を詠みながらも、妻の嘆きを「いたいたしき迄に」と捉える視線には限らないやさしさがある。短歌を作ることは心の叫びであり、何よりも心の救済であったのだ。

羽ばたきの去りしおどろきの空間よた
だに虚像の鳩らちりばめ
【虚像の鳩】

第二期の方法論を象徴する一首。何の羽ばたきなのか、誰が驚くのか、上句では何も明かされていない。宙ぶらりんな気持ちで読み進むと、いきなり「虚像の鳩」という不可解な語に出合つてさらに混乱してしまう。実体をもつ「物」は一つも詠まれていない。鳩が飛び立ったのちの「無」だけがそこにある。無や不在といった目に見えないものを言葉で表わすことはできるのか。その難題に肉迫した実験作と言えよう。「詩人リルケは死ぬまでまじまじと幼児のやうな目をひらいてをりました。幼児のおどろき、おどろきの心を失つた者はもう詩人ではない」（詩精神について）「新しき力としての文学」という理念を短歌によって形象化した一首である。

かすかなるけものとなりて我も居つ昼
の鳥夜の蛾と交わりて
【新樹】

一九七二年、六十歳を目前にして高安は長野県飯綱高原に山荘を建てた。自ら車を運転して山荘へ通う日々の中から自然に対する新鮮な感動に満ちた作品が生み出され、第三期のピークを成した。この歌では自己を「かす



岡井隆氏（左）と。（昭和51年京都での現代短歌シンポジウム）

かなるけもの」と表わしているところに注目したい。自我意識を消して五感のみを研ぎ澄ますことによって、自然との一体化を図ろうとしている。病弱な少年期と多忙な壮年期を過ごしてきた高安にとって、初めて迎える自然との豊かな触れ合いだったのかもしれない。あこがれをのみ追い求め来し一生あこがれは一つに収斂せざり
【光の春】



夫人と

最晩年の歌。胃の手術のため入院した折の一首である。「あなたの一生は何でしたか」と問われて一言で答えられる人は少ないだろう。だが高安は自分を導いてきたのは「あこがれ」だった、と言い切っている。金銭でも名誉でもなく、ただ「あこがれ」を求めて来た人生。何とすがすがしいのだろう。真実の探求から出発して、あこがれへの見果てぬ夢で終わった作歌人生。その純粹な魂の軌跡をたどるとき、胸が熱くなるのを禁じ得ない。

三 受け継ぐべきもの

架橋する人、といった印象が高安にはある。まず短歌とドイツ語との架橋である。現在では短歌を外国語に翻訳する試みがよく見られるが、高安はいち早く一九五九年に自作短歌六二首のドイツ語訳歌集「Herbstmond」（ヘルプストモント）（秋の月）を刊行している。歌集のまえがきの中で西欧の詩における韻のことなどに触れて、歌を朗詠する際のリズムの重要性について述べているところが興味深い。

架橋の二つめは短歌と他ジャンルの表現との融合である。若き日に知り合った作家の野間宏や富士正晴との親交は生涯続いた。画家の須田尅太や多くのドイツ文学者との交流もあった。また伯父の高安月郊（詩人、劇作家）から受けた影響も大きい。ともすれば歌人の活動が閉鎖的になりがちだった一九六〇年代以前の歌壇で、広い視野に立った高安の活動は時代の先端を行っていたと言える。

もう一つの架橋は、世代を越えた歌人との触れ合いである。七〇年代後半に、当時三、四十代の歌人たちがシンポジウム運動を展開した時期があった。年長の歌人の中で運動を



山中湖畔にて土屋文明氏（右）と。（昭和56年ごろ）

最も積極的に後押ししたのが高安であった。このように高安国世はジャンルや世代にとらわれない自在な活動を続け、現代短歌の新陳代謝を促す役割を果たした。もっと長生きをしていたら、今頃はインターネットを駆使して作品を発表し、現代と未来との橋渡し役を務めていたにちがいない。柔軟な表現意欲を私たちは受け継いでゆきたいものである。

（くりき・きょうこ「塔」選者）

*リルケ＝オーストリアの詩人。チェコ生まれ、パリではロタンの秘書。（二八七五―一九二六）